

メッセージアウトライン

ガラテヤ 5：1~12「信仰による救い」

「キリストは自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しっかり立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい」(1) パウロは自分がいのちをかけて伝道し、救いに導いたガラテヤ教会の人々をわが子のように思い、心配し、励まし、信仰に立つようにと願っている。にせ教師たちが要求していたことは、人はイエス・キリストを救い主と信じるだけでは救われず、律法に従って割礼を受けなければならないというものだった。しかしパウロはそれをきっぱりと否定する(2) 人が神の前に義と認められるのは、律法つまり神の戒めを全部完全に守るか、イエス・キリストの救いを信じる信仰によるかしかない。もしガラテヤ人が割礼を受けるといふならば、彼らは割礼だけでなく律法全体を守らなければならない。ガラテヤ 3:10 申命記 27:26 それは義務となる。しかし律法を守ることによる救いの道は絶望以外の何ものでもない。それはパウロが今まで何度も語ってきたことである。

律法に固執し、何とかそれによって救われようとすることは、とりもなおさずキリストから離れることであり、神の恵みから落ちてしまうことである。(4)

「私たちは、信仰により、御霊によって、義をいただく望みを熱心に抱いているのです」(5) これは未来おける救いの完成を示すことばである。今すでにイエス・キリストを自分の救い主と信じる者は救われているが、やがて再びイエス・キリストの来られる終末の時、世の終わりの時にそれが完成する。

「キリスト・イエスにあっては、割礼を受ける受けないは大事なことなく、愛によって働く信仰だけが大事なのです」(6) ここでパウロは初めて「愛」ということばを「信仰」との関係において用いている。信仰は愛のわざ、愛の行動、生き方を生み出し、それゆえ律法の要求をも全うすることになる。5:14,17 13:8~10 パウロは今まで律法によっては救われないということを強調してきたので、それを誤解して極端に走り、放縦な生活に陥ることがないようにとの配慮であった。律法を守ることによって人は救われませんが、父や母を敬え、殺すな、盗むな、姦淫するな、うそをつくななどという道徳律法は神のみこころを示すために有効であり否定されてはならない。

人を信仰からそらすような勧めは神から出たものではない。(7,8)「わずかのパン種が、こねた粉の全体を発酵させる」(9) そのように偽教師たちの教えも一人の人にとどまらず教会全体に影響を与えることになる。「あなたがたをかき乱す者は、だれであろうと、さばきをうけるのです」(10) たといそれが天使であろうと他の重要人物であろうと、もしこの福音の真理をかき乱すような者であれば、誰でも神のさばきを受けることになる。偽教師たちは十字架を語らない。そしていかにも正しいことを語る者のように律法を守り割礼を受けなければ救われないと教える。そんなことを語っているので、彼らはユダヤ人たちから迫害を受けるはずはない。パウロも同様にもし今でも割礼を宣べ伝えていたならばユダヤ人たちから迫害されることなどなかっただろう。(11) クリスマンもこの世と歩調を合わせ、何でもその言うところに従っていくなれば迫害を受けることなどないだろう。私たちはこの点において偽りやごまかしがあってはならない。